

輸入粗飼料の情勢

全酪連
購買生産指導部
購買推進課

北米コンテナ船情勢

4月1日付のGRI（海上運賃一斉値上げ）がいくつかの船社から案内されています。これらの船社が実際にGRIを実行するのか、また、その他の船社もこれに追随するのか、引き続き動向を注視していく必要があります。

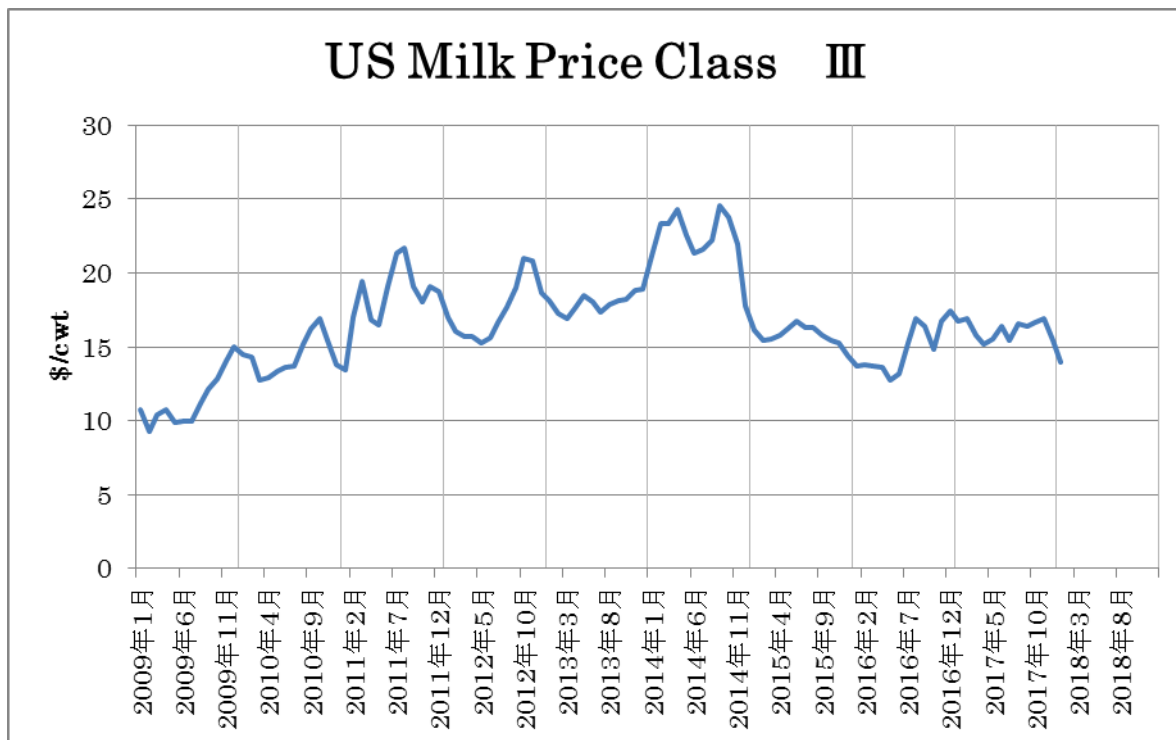
コンテナ船情勢の範疇ではありませんが、米国国内のトラック情勢は日に日に厳しさを増しています。背景として、米国経済の復調に伴い流通する貨物が増加し、これまで通りトラックが手配できないこと、また、以前から施行されていた運転手の労働環境に関する法規制をより強化したものが、昨年末より施行させたことが挙げられます。この規制強化は、ELD（ELECTRONIC LOG DATA）と呼ばれる業務履歴を記録する機械を導入し、運転・実働時間の管理を徹底することを目的としています。この影響により1日当たりの実働時間に制限が課されることから、特に遠距離の輸送において遅延が発生しやすくなっています。また、搬入出時の港での待機時間も実働時間に当たることから、実際に輸送可能な時間が減少し、輸送能力が大幅に落ちています。このため、港への搬入が間に合わず、予定していた本船に船積みすることができずに遅延する事例が多くなっています。

このような状況から、米国内での遅延だけではなく、国内運賃の値上げ圧力も今までにないほど高まっており、輸入粗飼料の価格へのコストの転嫁が避けられない状況になりつつあります。

米国乳価の動向

2014年にピークを迎えた米国内乳価（クラスⅢチーズ向け）はその後下落し、現在まで\$15/CWT（=\$15/100ポンド）前後で推移しています（下図参照）。また、米国農務省による最新の報告によると、乳製品の在庫量が増加していることから、2017年12月の全米平均乳価は前年同月を下回る結果になったようです。

飼料コストに大幅な上昇はない見られないため、収益が大きく減じる状況ではないと考えられますが、乳価と高い相関関係のあるアルファルファの需要については、多くの米国内酪農家は、今のところ手前の使用分のみを買い付ける動きを見せています。



ビートパルプ

＜米国産＞

今年度産については既報の通り、生産量が下方修正されたうえ、世界的に堅調な引き合いが続いていることから、米国産はほぼ成約済となっており、追加の引き合いには応えられない状況となっています。

新穀は、アイダホ州やミシガン州など早い地域ではあと1か月ほどで作付けが始まります。日本向け主力のミネソタ州及びノースダコタ州では4月中旬ごろから作付けが始まる見込みです。今のところ、作付面積が大きく増減する要素は見当たりません。

＜中国の動向＞

一昨年9月の米国、昨年9月のウクライナに続き、さらなる他産地の輸入を解禁する動きが出ています。中国の潜在的な需要は定かではないものの、各産地への引き合いが強まることで、ここ数年の米国産アルファルファや豪州産オーツハイの動きと同様に、ビートパルプの市場においても、需給バランスや市況へ大きな影響を及ぼす可能性があります。

アルファルファ

ワシントン州

17年産の産地在庫については、上級品はほぼ完売しており一部の低級品には若干余裕があるといった状況です。昨年の冬は降雪が多く、肥育牛などの放牧が十分でき

ず、低級品を中心に購入が盛んとなり在庫は一掃されました。しかしながら、今年は降雪が少ないため、昨年のような放牧向けの代替需要は強くないと考えられます。このため低級品については、新穀まで一定量の在庫は残っていくものと推測されます。

18年産の作付面積は昨年に比べ5-10%ほど減少すると見られています。特にコロンビアベースンでは、17年産スタート時から産地相場が高値で推移しているチモシーへ転作する圃場が増えそうです。

カリフォルニア州

南部カリフォルニア州では、2018年産の1番刈りの収穫作業が2月中旬から始まっています。中東向けを中心とした輸出向けの需要は堅調に推移しており、産地価格は昨年の同時期に比べ早くも大きく上昇しているとの情報が入っています。作付面積が漸減している状況で、さらなる需要が加わることで産地相場への影響が懸念されます。輸出向けとしては、農業用水の使用を制限しているサウジアラビアからの需要の伸長は顕著となっています。来年には完全に自給飼料への農業用水の使用が打ち切られると言われており、サウジアラビアからの輸入飼料への需要は今後さらに強まってくると考えられます。

米国産チモシー

主要な産地では、低級品については一部未成約のものが残っているようですが、上級品についてはほぼ成約済となっています。新穀については、産地相場の高騰を背景に作付面積は前年比10%程度増加すると見込まれています。

日本および韓国からの需要は、2017年内は堅調に推移していましたが、これまでの過剰輸入の影響からか、1月の輸入量は大きく減少しました。日本の1月の輸入量は18,201トンで前月比80%、前年同期比62%となっています。

カナダ産チモシー

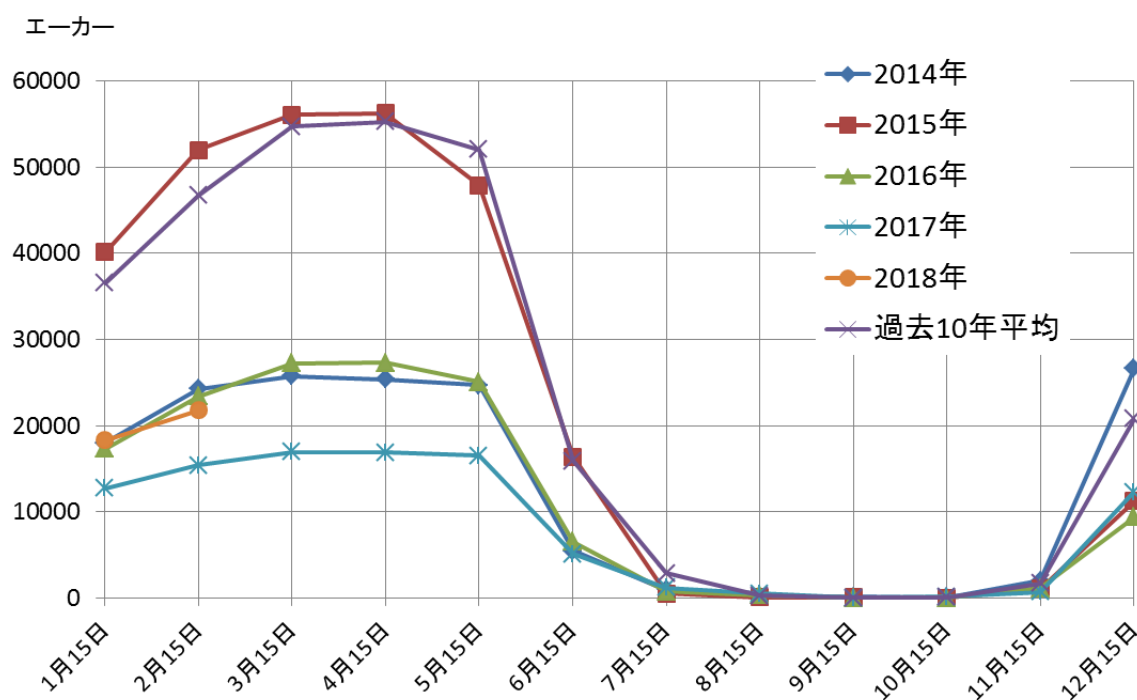
既報の通り、17年産は収穫期の天候に恵まれたことから、南部レスブリッジ地区および中部クレモナ地区の双方において、発生量の半数以上が上級品となりました。作柄が良好であったことに加え、米国産チモシーと比較して相対的に価格競争力があることから、日本および韓国からの需要は引き続き堅調であり、産地在庫はほぼ成約済の状況となっています。

スーダングラス

日本からのスーダン需要は引き続き堅調に推移しています。17年産の上級品の産地在庫は非常に限られています。中～低級品については、まだ若干の在庫はあるよう

ですが、これらも新穀までにはほぼ全てが出荷される見通しのようです。このため、現時点では18年産においても17年産と同様に繰越在庫が非常に少ない中でのスタートとなりそうです。

18年産の作付面積は春先にスーダンと競合する小麦の相場が引き続き低迷しており、加えてスーダンの産地相場が生産農家にとって魅力的であることから、昨年と同程度の40,000～45,000エーカーになると予想されています。現時点で、小麦の作付面積は昨年よりも40%増えており16年産並みとなっていますが、全体の傾向を見るには3月中旬に発表されるスーダンの作付面積を確認する必要があります。一部の早い圃場では早播きスーダンの作付けが開始されています。



インペリアルバレー小麦作付面積 (2018年2月中旬時点)

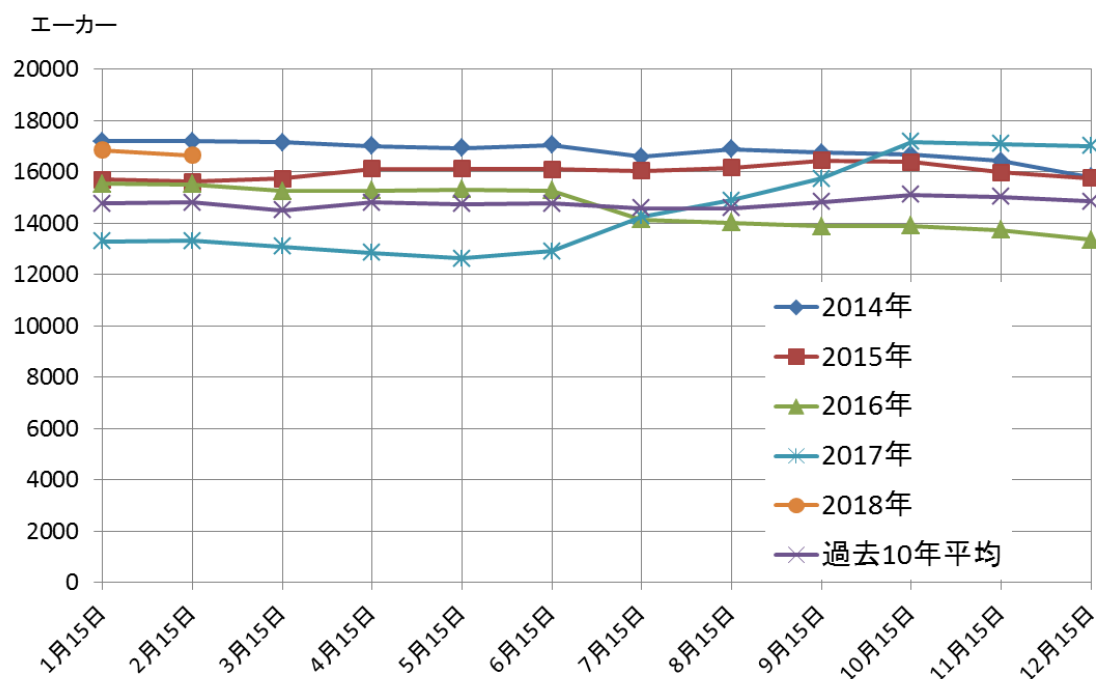
クレイングラス (クレインは全酪連の登録商標です)

日本および韓国からの需要は引き続き堅調に推移しています。17年産の産地在庫のほとんどは既に成約済みとなっています。品質がやや劣るものについても韓国向けを中心に出荷は順調な状況が続いており、余剰在庫はほぼ残っていない状況です。

2月中旬時点のクレイングラスの作付面積は前年同月比25%増となっており、18年産の作付面積は16年産並みに回復することが期待されます。早い圃場では、既

に圃場への水入れが開始されており、18年産の収穫開始に向けた準備が進められています。今後の気候、天候次第ではありますが、例年よりも早めに新穀の出荷が始まる可能性があります。

作付面積が増加することで産地相場の軟化が期待される一方で、現状の強い引き合いの中、17年産在庫も少なくなってきたことから新穀の収穫とともに、一斉に引き合いが殺到することで産地相場が高騰することも懸念されています。18年産のスタートは慎重に産地相場や市況を見極めていくことが極めて重要になりそうです。



	1月15日	2月15日	3月15日	4月15日	5月15日	6月15日	7月15日	8月15日	9月15日	10月15日	11月15日	12月15日
2014年	17192	17192	17140	17005	16930	17038	16578	16873	16745	16659	16413	15786
2015年	15691	15605	15724	16111	16111	16086	16026	16152	16430	16372	15974	15746
2016年	15526	15501	15234	15255	15295	15262	14142	14002	13871	13896	13739	13354
2017年	13276	13296	13092	12846	12614	12901	14255	14875	15722	17159	17088	16999
2018年	16832	16628										
過去10年平均	14754	14803	14490	14800	14744	14768	14586	14570	14813	15101	15024	14835

インペリアルバレー クレイングラス作付面積（2018年2月中旬時点）

ストロー類（フェスキュー・ライグラス）

日本および韓国からのストロー需要は引き続き堅調に推移しています。背景には、17年産の単収が例年よりも少なく、生産量及び在庫が少ないこと、及び豪州産ストロー類が降雨被害を受けて生産量が不十分なことが挙げられます。堅調な需要を背景に産地価格も高止まりで推移しています。

年明け以降、韓国の自給粗飼料が昨年に比べ良好である点や新穀以降の相場軟化を警戒した生産農家は、各サプライヤーとの商談に応じ始めています。このため、多くの産地在庫は成約が進んでおり、今後の大幅な追加買付は難しい状況になっています。

2月中旬に米国農務省から発表された2018年産の種子採取向けの禾本科牧草の作付面積予測によると、主産地のウィラメットバレー全体で作付面積は4%程度増加する見込みです。アニュアルライグラスやトールフェスクの作付面積も増加することが予測されていますが、種子価格が低迷しているペレニアルライグラスについては作付面積がやや減少する見通しとなっています。

豪州産オーツハイ

2017年産の豪州産オーツハイ、ストロー類の生産は終了しています。

品質全般の傾向としては西豪州では収穫期を通して断続的に降雨があり、上級品の発生は北部を中心とした一部に限られ、大半は何らかの降雨被害を受けた中～低級品の発生が中心となっており、上級品の供給力は例年よりも少ない状況です。

南豪州では収穫期の天候に恵まれ、発生のお大半が上級品となっています。東豪州では産地のエリアによっては作況が大きく異なりますが、産地全体で見ると、上級品から低級品まで満遍なく発生しています。

日本向け及び韓国向けの出荷は概ね安定的に推移しているようです。中国向けは旧正月明けから商談が活発化しているようで、今後の出荷数量は増えていくと考えられます。

以上